

『論語疏』 卷6 文化財指定の顛末

すみよし ともしこ
住吉 朋彦

(附属研究所斯道文庫教授)

『論語疏』^そ 卷6 (図1) は、『論語義疏』^{ぎそ}とも称する『論語』の注釈書で、中国南北朝時代の梁の学者、皇侃^{おうがん} (488-545) が記したものの。抑も紀元前に遡る2500年も昔の孔子のことは、今も何とか理解できるのは、500年ほど後の漢魏時代の学者が、注を作り経義を書き留めてくれたお蔭である。そこからまた500年、隋唐に至る間の南北朝時代は、哲学思想の論議が流行り、經典の解釈は、その恰好の素材であった。そうした注説をまとめ綴ったのが「義疏」と称する注釈書で、『論語』の字句の解釈をめぐる議論が、『論語義疏』という書の主な内容である。

『論語義疏』の説は、時代の精神を映して闊達ながら、冗長で要領を得ない所もある。さらに500年を経て、合理主義の伸長した宋代に『論語正義』という簡潔な注釈書がままとると、『義疏』は時代錯誤と見なされ、その伝を絶ってしまった。今から約1000年前のことである。しかし歴史主義的な文献観が発達した清代になり、『論語義疏』の日本に伝わることが再発見され、南北朝時代精神史の一齣として、再び脚光を浴びる。

日本には、早くから梁代の書籍が、いくつか伝わっている。『千字文』『玉篇』『文選』といえは聞き覚

えがあるであろうか。これは中国南朝との古い付き合いの結果で、百済を媒とした伝来もあったであろう。『論語義疏』はその列に並び、他にも早稲田大学図書館所蔵の唐写本^{らいきしほん}『礼記子本疏義』^ぎ 卷59は、皇侃^{ていしやく}の弟子の鄭灼^{ていしやく}がまとめた同類の書で、光明皇后の所持本である。

さて『論語義疏』が日本に伝わったといっても、今日その全文が知られるのは、室町時代、15世紀の写本によってであり、斯道文庫所蔵の文明19年(1487)写本は、その代表的なもの。文明年間は、中国でいえば明前期、本書が伝を絶った宋代からさらに500年近く経っており、清朝の学者間には、日本で作られた偽書ではないかと疑う説も存在した。

この疑問は、20世紀初頭、ポール・ペリオにより敦煌莫高窟から『論語疏』卷2 (Pc3573/BnF) の唐写本が発見されたことで半ば解決したが、今回の『論語疏』卷6の再発見により、さらに磐石となった。当該本の卷6は、現在通行している『論語』および『論語義疏』の卷5に当たる部分で、紙背に奈良平安時代の縫印^{つぎていん} (料紙の継ぎ目を跨いで捺される管理者印) があるため、当然その本文は8世紀より古い。室町時代写本の卷2や卷5も、これら中国

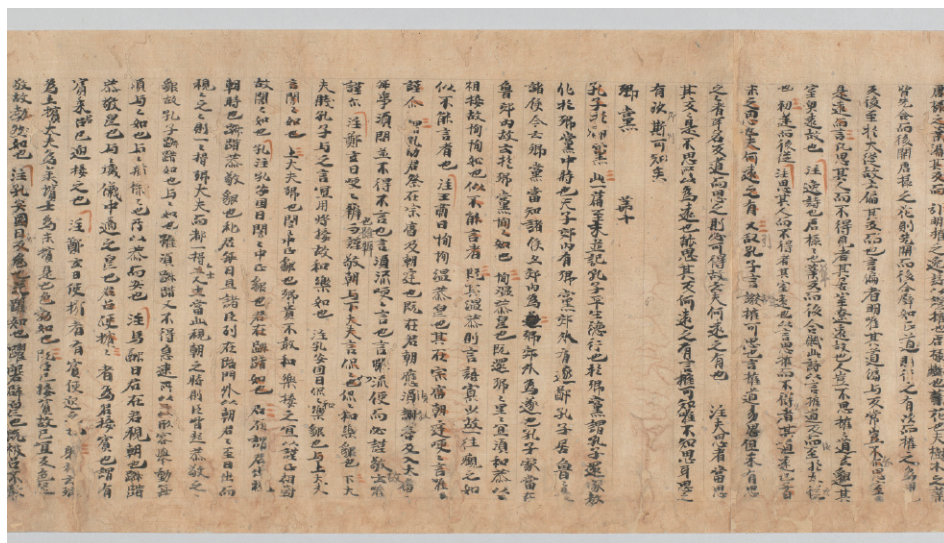


図1 『論語疏』 卷6

写本の残巻と、ほぼ同内容であったことから、全10巻がそれに準じ、唐以前の内容と認められる。

しかし再発見の真価は、その先のことである。まず当該本の古さは頭抜けており、7世紀以前と考えられる。これは著者皇侃の生きた6世紀にも近接する。展観で本資料を目にした現代人、特に学者は、一見して不思議な感覚に襲われたであろう。行款も不揃いの異常な字面に出くわすからである。稿者自身、初めて見た時の戸惑いを忘れ難い。ともかく頭の中で比較対照すべき資料が、何も浮かばないのである。ここが評価の分かれ道となる。

内容は『論語義疏』に違いない。書店から一部の写真を預かった稿者が気を取り直し、この異常さには何か大きな意味があると考え出したのはそこからで、結論からいってしまえば、それは、楷書成立以前の書であった、ということである。

楷書の成立には、二つの要素がある。一つは、篆書でも隷書でもない、紙の時代の標準書体としての楷書で、中国南北朝時代が確立期であり、書道で習う初唐の欧陽詢おうようじゅんの書が、その完成した姿である。もう一つは標準字体の成立。字体とは、文字の字面構成の問題で、例えば「應」と「応」との違いである。これは、儒教の經典を石碑に刻んだ、唐開成石經とうかいせいせつ (837) がその完成形で、南北朝の合一した隋唐の交 (7世紀) が確立期であった。『論語義疏』巻6の文字には、どちらの意味からいっても楷書の標準が確立しておらず、唐以降の文字を標準とする現代人から見ると、概して異常と感ずるのであった。

また世の中には、そう極端に古い写本の存在を信ずることはできないと、贋作説を口にする論者もある。本書の伝来に藤貞幹とうていかん (藤原貞幹ふじわらさだもと、以下「貞幹」とする) が関与したことを知ると、贋作論者は勢いを増し、抑も全面的に贋造ではないかと、原本を見ることなく公言する者まで現れた。

江戸時代中期の有職故実家である貞幹は、早くから毀誉褒貶の著しい人物で、好古の癖を考証学に昇華させた稀代の学者であるにも関わらず、典籍の沽却に関わったり、強弁ともとれる激しい論争を行ったりしたこと、著述にも疑惑の目を向けられることになった。考証学も黎明期のこと、貞幹にしか知り得ない、原資料に基づく情報を弄するうち、そこには単なる誤認も含まれていたが、かえって偽証の誹りを受ける羽目に陥ったのである。

しかし、小倉慈司氏 (元文学研究科講師) が指摘されたように、その著作に壬生家本として記録された『論語疏』の場合、闇に包まれていたこの本の伝来に光をあて、貴重な証言を遺したといえる。もっとも、一戸渉氏 (斯道文庫教授) が明らかにしたように、その片隅から破片を取って古紙の見本としたようであるが。貞幹の贋作を臭わせるような憶測は、彼のこの行いと矛盾する上、種村和史氏 (商学部教授) が精密に行った本文校勘の結果、中国南北朝時代以前の伝写に起因し、後世からは創出し得ない重大な異文が含まれていたことから、成り立ち得ないのである。

そうした理解は、三田メディアセンターのスペシャルコレクション担当による力強い支えの上に、塾内に設けた慶應義塾大学論語疏研究会において諮られ、多角的な意見交換を経て、2020年10月の第32回慶應義塾図書館貴重書展示会「古代中世 日本人の読書」展¹⁾ 図録により、初めて世に問われた。しかしこれは、孤立した古代写本の分析であって、解題を担当して無責任のようではあるが、正直に言えばあまり自信はなかった。

一連の研究を経て、2021年11月に勉誠出版社から影印本『〈慶應義塾図書館蔵〉論語疏巻六〈慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵〉論語義疏 影印と解題』を刊行した。共著者の種村和史氏、一戸渉氏、齋藤慎一郎氏 (文学研究科博士後期課程、当時) の尽力、佐藤道生先生 (名誉教授) の付序を忝くし、日本学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の助成を得て、世に送り出した形である。慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクションにおける画像公開²⁾ や、中国での同様の出版を条件としながら刊行を引き受けてくださった、勉誠社吉田祐輔社長の英断に負う所も大きい。ともかくも『論語義疏』の最古本と最善本とを、慶應義塾の名を冠する一冊として発刊できたのは、幸いなことであった。

ただ、稿者が当該本の位置付けについて心から確信できたのは、2021年3月10日に、早稲田大学図書館特別資料室の計らいにより、国宝・唐写本『礼記子本疏義』巻59 (図2) 全紙の原本を、閲覧させて頂くことができたからである。半日間、隣接のレクチャールームを貸し切りにして、室員の方が常に在室してくださる体制の下、大机に卷子本の全16張 (約7m) を展開、調査用具を乗せた台車を曳きな

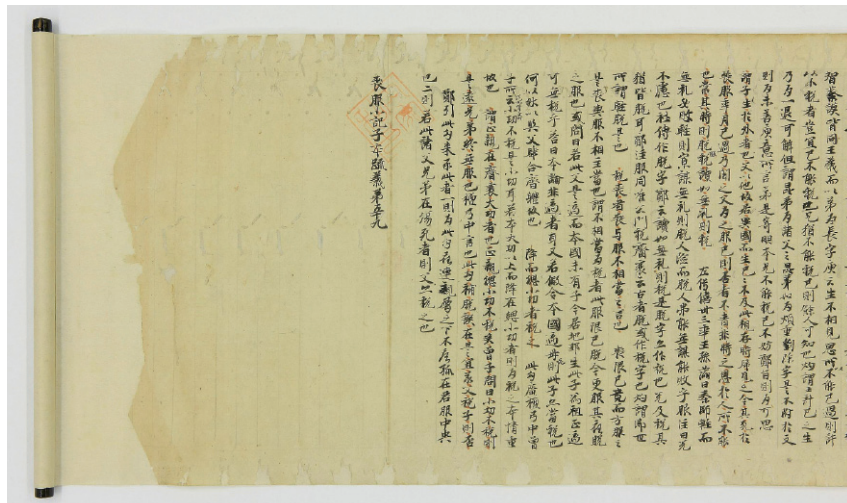


図2 国宝『礼記本疏義』巻59 早稲田大学図書館蔵

がら、自ら移動し具さに観察したが、こちらは国宝の指定に相応しく、確立期の秀抜な楷書によって、見る目に美しい美観を湛え、筆作者の一貫した意志の力を滲ませていた。しかし、あの『論語疏』巻6の発するような違和感に襲われることはなく、この美しい標準器を得て、その位相がよく実感できたのである。

この前後、種村教授、齋藤氏と稿者は、伝道師よろしく内外への宣伝にも努力した。成均館大学校国際学術会議「東アジア文献学の新地平」(2020年11月14日)、斯道文庫開設60年記念フォーラム「書誌学のこれまでとこれから」(同11月28日)、国立台湾大学中文系学術專題演講(2021年3月18日)、北京大学国際漢学家研修基地における東亞漢籍伝播研究ワークショップ(同4月3日)といった具合に、半年間に4回ほど報告を行い、韓日台中と紹介活動を実施、ポストコロナ期でみなりモートでの開催であったが、各地で様々な反響を呼んだ。北京大学の会を主催された劉玉才教授は、中国における影印出版を建議され、2024年11月には上海古籍出版社から、勉誠出版社版の中国語訳となる『論語義疏二種』を、慶應義塾大学論語義疏研究会と北京大学東亞古典研究会の共編として刊行することができた。

幸い、これらの成果が汲み取られ、2025年3月21日、文化庁文化審議会文化財分科会の答申³⁾を経て、「論語疏巻第六」は、日本国指定の重要文化財となったというのが、今日までの経緯である。4月19日から5月11日まで開かれた、京都文化博物館における「新指定国宝・重要文化財」展⁴⁾には、故あって開

会時刻に推参したが、居並ぶ名品に伍し、やはり特異な存在感を放っていることを確認した。当該本の譲渡をお決め頂いた一誠堂書店の酒井健彦社長、推薦に同調してくださった教員諸賢、収蔵を決めてくださった塾経営陣と、歴代図書館長、選書関係者、適切かつ効果的な収蔵、また指定が視野に入ってから煩雑な手続きも実行してくださった旧貴重書室、現スペシャルコレクション担当の皆様、一塾員として深く感謝申し上げたい。

今後は微力ながら、その保護と活用に基づき世界文化史の構築に資するべく、さらに研究の気運を高めて行きたい。さし当たり、早稲田大学図書館の国宝『礼記本疏義』巻59と、慶應義塾図書館の重要文化財『論語疏』巻6を並べて陳列し、双方比べて参観者の知見を深める「義疏慶早戦」の開催を、かなり真面目に提唱する次第である。

注・参考文献

- 1) 慶應義塾大学三田メディアセンター、「第32回慶應義塾図書館貴重書展示会「古代中世 日本人の読書」」。
https://libguides.lib.keio.ac.jp/mit_annual_exhibition/32.
- 2) 慶應義塾大学メディアセンター、「慶應義塾大学メディアセンター デジタルコレクション」。
<https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/rongoso>.
- 3) 文化庁、「文化審議会の答申(国宝・重要文化財(美術工芸品)の指定等)」。
https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/94188001.html.
- 4) 文化庁、「令和七年新指定 国宝・重要文化財 目録」。
https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/pdf/94202201_02.pdf.